

アサーティブに生きる

2024・1・30 重枝 一郎

25年前、私は全校集会で「アサーティブに生きよう」という話をした。その時、生徒の耳には「あさってに生きよう」という風に聞こえたらしく（笑）、生徒は「明日ではなく、明後日なんだ。さすが重枝先生深いな」と言われたことを思い出す（笑）。

一昨年の朝礼拝の校長講話で、「校長講話^[7]アサーティブに生きよう」というタイトルで話した。その際、ドラえもんの歌の替え歌で「アサーションの歌」を歌った。また、「アサーティブ」の言葉だけだが、本年度の「校長講話^[4]壊れたレコード」や昨年度の「校長研修だより71（Q-U アンケート）」にある。本校でも外部講師の先生を招聘して中1からアサーション TR の講座をしている。ただ、その後の日常でその振り返りがなければ、意義深い授業にならない。そのためには生徒に「〇〇さん、それってアサーティブなのか」という問いを投げかける必要がある。

さて、教師といえども人間である。相性の合わない生徒がいても不思議ではない。しかし、「好き・嫌い」や「相性の合う・合わない」で相手への対応や態度に差があると、必ず自分がしっぺ返しをくらう。もちろん“えこひいき”などもってのほかである。その場合どう対応するとよいのだろうか？

その答えはシンプル、「適切な距離をとること」である。

私たちは、ある程度「誰とでも組める力」をもって、いろいろな相手と良好な関係を築き、さらには、生徒の主体性を引き出すマネジメント力を持たなくてはならない。でもうまくいかない場合は「適切な距離」である。

では、その「適切な距離」とは？ キーワードは「アサーティブ」な態度である。

アサーティブとは、簡単に言えば「自分だけではなく、相手の感情に配慮した言動をとること」を言う。これは適切な距離感になる。一方で、近すぎてよくないのが「アグレッシブ（攻撃的）」と、遠すぎてよくない「ノンアサーティブ（非主張的）」である。

「アグレッシブ」とは、相手を否定するアプローチである。「それはおかしい」とか「これは間違っている」といった否定的な言動が最たる例である。相手の態度や考えを説得することで変えようとするアプローチである。

また、「ノンアサーティブ」とは、相手を立てすぎて、遠慮したり、委縮したりして、とるべき言動が取れていないことである。

だから「アサーティブに生きる」である。「アサーティブ」な態度では、いかなる生徒に対してもコミュニケーションをとる際には、「好き・嫌い」などの個人的感情を横に置き、まずは生徒の話を聞く。その時、「出来事」だけでなく、生徒がどのように思っているのか、つまりその生徒の「心や感情」に関心を持ちながら聞くことが大切である。必ず「出来事」の裏に「感情」がある。

こういう話をすると、「アサーティブ」にすればうまくいくと思いがちである。そうではない。私自身、「アサーティブ」な態度と「アグレッシブ」な態度を使い分けたり、時にノンアサーティブな状況もある。このように難しいから、いつも相手に少しでもリラックスした状態で話してもらえるように工夫をする。なぜなら、そうすることで、売られた喧嘩は買うといった「アグレッシブ」や、気を遣いすぎる「ノンアサーティブ」にならないからである。よくするのが、自分の失敗談を話して、相手をリラックスさせる。笑いを取りに行く。結構、相手の頑なな気持ちがほぐれる。こうなると私はいつも「ある意味、自分の失敗の元を取った」と思う（笑）。

生徒と話すときは生徒の話をさえぎらずに聞き切る。また、生徒に過度な期待をかけるのは NG。「こうあるべき」といったような自分の信念はいったん横に置く。生徒の話を聞き切ることで、いつの間にか生徒とよりよい関係になっていく。

J3の修学旅行 行ってらっしゃい！
生徒のみなさんに「アサーティブにやろう！」とお伝えください。